ゼロの国のアリス

獅堂まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの国のアリス

【Ｎコード】

Ｎ９５７６Ｋ

【作者名】

獅堂まこと

【あらすじ】

公安局に所属する弥白は、義妹アリスへの気持ちを隠して過ごしてきた。ある日、星間移動船イーリアス号の事故により、不思議な惑星に来てしまった弥白と、義妹のアリス。しかし、アリスは、何者かにさらわれてしまう。そこは、かつて「不思議の国のアリス」をモデルに開発されたテーマパークであったが、失敗作となり、現在は「流刑星」として使用される危険な惑星だった…。訪問、ありがとうございます。

第一章（1）　とある青年Ｙの苦悩

神様　かみさま…

ひょっとして俺は、変かもしれません。

「兄さんー」

星間移動船「イーリアス」。

「兄さんー？」

その船には、母星から、移民星「ユートピア」へ向かう間に、世界のセレブ達が社交パーティを行っていた。

「兄さん、どこにいるの？」

目の前を、サーモンピンクのドレスを着た、金髪の女性が通り過ぎていく。彼女が通る通路には、赤い絨毯が敷き詰めてあり、その両側には、ある一定の間隔ごとに、警護人が配置されている。

皆、黒いタキシードに、サングラスをかけていて、人形のように動かない。

「アリスちゃん、君の兄さん意地悪だねぇ。可愛い妹が、一生懸命に呼んでいるっていうのにさ。」

その女性に、グレーのスーツに身を包んだ若い男が、声をかけた。

「弥白は、そこにいるよ。」

「ばか、言うな！」

叫んでしまった瞬間に、直立不動の姿勢が崩れてしまった。

「兄貴っ！呼んでいるんだから、返事くらいしなさいよ！」
「仕事中だ。」
身内とはいえ、参加者に声をかけたら、怒られるだろうが。
「公安局警備部警護課の、お役目大事な堅物アニキだからねぇ…アリスちゃん、こんなやつほっといて、行こうよ。」
「だれが、堅物だ、獅堂？」
獅堂鷹男は、巨大アパレル会社の会長の息子だ。商売柄、身なりが派手。蜜のような濃い金髪には、軽いウェーブがかかっており、指には、ゴツい宝石を着けている。
「そのまんまだよ。二階堂財閥の息子が、なんでパーティに出席せずに、公僕のお仕事してるんだよ。」
「仕事だからだよ。それに、俺は、ハデ男みたいに、こういう場所はあんまり好きじゃないんだよ。」
「ね、とうさま知らない？はぐれちゃったのよ。」
「父さんも、母さんもこの通路をとって、向こうの広間に行ったよ。」
「ありがとう、探してみるわ、またね、兄貴。」
ぱたぱたぱたと、ドレスのすそを持って、軽く駆けて行く。
「可愛いね。あと二年すれば、美女になりそー。」
「汚らしい目でみるんじゃねぇ。」
「俺が可愛がってやろうか、弥白。」
獅堂の胸ぐらを掴んで、にらみつけてやる。
「処刑されたくなければ、そういう軽口は慎む事だな。」
「おいおい、冗談だ。そんなおっかない顔するな。全く、アリスちゃんも、厄介な義兄を持ったもんだな。」
義兄―。
そう、俺が七歳の時、秘書をしていた母が、再婚した父さんの娘が、アリスだ。
「どうするよ、遅かれ早かれ、アリスちゃんには婚約者候補が列をなしてやって来るぞ。」

「ああ、来るだろうな。」
「平気なのか、弥白？」
「何がだよ？」
「バレバレなんだよ、おまえ。」
アリスちゃんが好きなの―。
「アホか！なんちゅう事を言うんだ、お前は！血が繋がっていないとは言え、あいつは、もう十年以上、一緒に暮らしている家族だぞ。」
「家族ねぇ…。」
「それに、家族じゃなくても、あんなはねっかえり、俺の好みじゃねぇよ！」
「じゃあ、本気でもらうぞ。」
「おまえみたいな、ハデ男にはやらんわ！」
その時、ズシン、という音とともに、船体が激しく揺れた。
「なんだ、この揺れは？」
揺れは、おさまらずに、より激しくなる。危険を知らせる警報が、響き渡る。
乗客は、パニックを起こして、恐怖に覚えた女性客が悲鳴をあげている。
「大変だ、エンジンルームに爆発が起こった。」
警備課の上官が、俺達のもとにやってきた。
「おまえたちは、念のため、乗客たちを、非難船に乗せよ。これだけ大きい船だ。落ちはしないだろう。私は、操縦室へ状況を確認しに行く。」
わかりました、と他の同僚とともに、敬礼する。
「獅堂、お前もさきに行け！」
「わかった。」
その時、通路の奥で、爆発音が聞こえた。
「あの広間には、弥白の家族がいたんじゃなかったか？」
「何が起こったんだ？」

他の同僚の何人かと一緒に、大勢の人が、逃げ出す流れに逆らって、なんとか広間に入る。
すでに部屋の一角では、爆発で壁が崩れ、火災が起こっていた。
「母さんと、父さんか？」
「弥白！」
二人は、人に流れに押されながら、身動きが取れないでいる。
「落ち着いて、非難船に逃げるんだ。」
「でも、アリスが…。」
母さんは、目に涙を浮かべている。
「爆発した壁の向こうに、きっといるのよ、他の客達も！」
何だって？
「わかった、落ち着いて。俺らが助けるよ。だから、早くこの部屋を出たほうがいい。」
二人は、うなづいて、人の流れにのって、広間を出た。
火が先ほどよりも強くなった所をめがけて、走る。
すると、爆風で、気を失ったのか、何人かの人が倒れていた。
「息は、あるな…。早く運ぼう。」
他の同僚達とともに、救出に取り掛かる。
「兄貴！」
アリスが、瓦礫に囲まれた間に、座り込んでいた。瓦礫のおかげで、火はさえぎられている。
「アリスか？」
「ええ、振動に驚いて倒れた時に、足をひねったみたいで立てないのよ。」
「痛いのは、どっちの足だ？」
「右足。」
右足を外側にして、アリスを抱きかかえて、広間の出口まで走る。
その時、もう一度、船体が、大きく揺らいだ。
そして、船体は、徐々に直角方向に向かって、傾き始めた。
通路が、まるで滑り台のようになり、装飾品などが、転がり落ち

ていく。
「やだ！何？一体どうなっちゃうの？」
「こりゃ、やばいぜ。」
壁が出っ張っている部分を目指して、飛び移る。それによって、滑り落ちていく事は食い止められたが、緊急事態なのには、変わりない。
「警報、イーリアス号、制御不能、乗客は非難船に急いでください。警報、イーリアス号、制御不能。」
無機質な機械音が、スピーカーから鳴り響く。
「逃げられたら、そうしてるっつーの！」
アリスは、恐怖の為、ぎゅっと目をつむって、背広にしがみついている。
普段はめったに祈らない神に向かって、願った。
さらに、大きな衝撃が、船体を襲う。

俺の意識は、闇に落ちた。

第一章（2）　落ちた場所は不思議の星でした

それから、どれほどの時間だったのか。
俺は、暗闇の中で飛翔していた。
闇の空間を、風に吹かれる鳥のように、悠然と飛んでいる。
そのうち、周囲の色彩が変わった。
黒から赤へ、赤から青へ、黄色、緑、白…。
そのうち、視界が霧が晴れるように、開かれていく。
色は、蒼穹。澄みきった。
下には、限りなく広がる、金色の麦畑。
急に、下から、麦が魚群のように、飛び出してきた。
それは、俺の足を捕らえると、そのまま、生き物のように、体全体を飲み込んだ。
溺れた時に、必死に水をかくように、麦から逃れようともがく。
しかし、砂に埋もれていくように、体はどんどん沈んでいく。
麦の隙間と隙間に、誰かの姿が見える。
少女が、何ものかに、連れ去られようとしていた。
助けて、と俺に向かって、叫ぶ。
（アリス…？）
見覚えのある顔を、もう一度見ることもなく、意識は再度、遠のいていった。

「おーい、兄ちゃん、生きてるかー？」
誰かに、激しく体を揺さぶられている。
「おーい、生き埋めの兄ちゃんー。三途の川は、渡ってる最中か？」
さらに、激しく揺さぶられた。
「起きへんなー。肺まで砂が入ったんかなー？」
こちょこちょこちょこちょ。

「やめんか！」
「おおう、蘇生したか。」
足の裏をくすぐるな、足の裏を。
「砂に埋まっていたわりには、威勢がいいな。他の怪我はなさそうやな。」
青年は、褐色の肌に、黒髪で、その上には、帽子をかぶっていた。黒いつばのついていて、シルクハットに似ているが、素材は、絹のような光沢がない。長い間、使用したのか、ややくたびれているし、今は、砂埃のせいで、すこし白っぽい。
「助けられたみたいだな。感謝するよ。どうもありがとう。」
「いいって事よ。それより、この後ろの巨大船は、兄ちゃんの乗っていた船なんか？」
後ろを振り向くと、砂漠の上に鉄の残骸と化した、イーリアス号があった。船体の骨組みが、ところどころ原型をとどめて残っている姿は、巨大な生物の骸のようだった。
やっぱり、墜落してしまったのか。
「他の人間は、誰も見てへん。船の残骸の中には、死体すらない。みんな、宇宙空間に振り落とされたんかな。」
「俺だけ…？そうだ、俺の妹を知らないか？」
気を失う瞬間の光景―あれが、夢ではなく、現実ではなかったのか。
「一人だけ、兄ちゃん以外に、綺麗な服を来たお嬢ちゃんを見たな。綺麗な金髪の。他の人間は、知らへんな。」
「それ、俺の妹だ！やっぱり、気を失う瞬間の光景は、夢じゃなかったんだな。誰かに、連れされれてた。」
「ちょうど、俺らがここに来るときに、入れ違いで去っていったわ。」
「助けろよ！」
「知らんがな！早いもん勝ちや。兄ちゃんは砂に埋まってたから、気づかれへんかったんやな。」

早い者勝ちって、今、言ったか？
「女性は、貴重やからな。この星では。」
「そうだ、ここは、そういえば、どこの星なんだ？言葉が通じるって事は、移民星のどこかなのか？」
それなら、近くの連絡施設にたどり着きさえすれば、迎えに来てもらうことができる。
「ヒトが住んでるけど、兄ちゃんが、家に帰るのは、無理な話やで。」
「どうしてだよ。」
「ここは、流刑星や。罪人を運んで置き去りにする星やから、帰る手段はない。」
「な、そんな星聞いた事ないぞ。」
「一般市民には、知らされてないんや。母星も、移民星も、人口過密で刑務所立てる為の土地がないやろ。その代わりに、移民には適さない星を、そのまま刑務所に仕上げたんや。」
「じゃあ、この星には、罪人が居るってことじゃんかよ！おい、妹だ、妹は、誰に連れられていったんだ？」
確か、すれ違ったって言ったよな？
「わかってはいるんやけど…。この星には、人が住める島は、ここひとつしかないやけど、住民は、三つの集団に分かれて、生活してる。一つは、＜赤の女王＞、＜白の王＞、＜帽子屋＞の三つや。兄ちゃんの妹は、赤の女王一派に連れていかれたと思うで。この砂丘は、誰の領土でもないから、何かを得るには、早いもの勝ちって決まってる。」
「じゃあ、そこに行けば、返してもらえるんだな？」
「交渉しだいやな。どこの集団も、女性が不足やから、手放したくないやろうし。子孫を受け継ぐ為の、女性の数が、この星では圧倒的に、少ないからなぁ。」
罪人の子孫を、受け継ぐだと？
凄く、恐ろしい台詞を言わなかったか、今？

「あ、でも、この星は、女性優位で、どこでも女性の意思は尊重されるから、兄ちゃんの脳裏に浮かんだ心配はしなくていいで。だいたいリーダーのものになるけど、抜け駆けしたら、他の男共に集団で抹殺されるし。」

「じゃあ、とりあえず、すぐに危険ってわけじゃないんだな？」

「それは、俺が保障する。それに、女性は、魔物の脅威からも、集団を守る術となる。この島には、魔物が住んでいるんや。魔物に女性を貢ぐと、次の期間までは、魔物も人を襲わなくなるんや。その理由もあって、どこも女性は貴重な存在や。」

「そりゃあ、生贄だろうが！」

早く、アリスを取り返しに行かないと、やばいじゃないか。

「あんた、アリスの居る場所を知っているんだろう？頼むから、連れて行ってくれよ。」

「やだね…と言いたいところやけど、どのみち、今から行くには、日が暮れて危ない。この巨大船の残骸で、使えそうな部分を俺の家まで運んでくれたら、ええよ。兄ちゃん、ちょっとは機械いじりの知識もありそうやから、それで手打ちや。」

「乗った！」

ハンドタッチして、取引は、成立した。

「どのみち、今から行くには、日が暮れて危ないし、俺の村を通ってしか、妹のところには行けへんよ。」

「わかった。じゃあ、早速、船の残骸を解体して、持って行こう。どんな事に役立ちそうな物が欲しいんだ？」

俺達は、早速、取り掛かる事にした。

第一章（3）　ワンダーランド

砂丘の上を、大型の二輪車が、駆けて行く。
使えそうなものを、そりに乗せ、二輪車が引いている。俺は、舞い上がる砂埃を吸い込まないように、布で顔の半分を覆って、サイドカーに乗せてもらっていた。
「いやあー、大量、大量。前のやつらは、船の中まで、見ずに帰ったんやろうな。」
そりの中には、レーザー銃が積まれている。あれほど、警護人がいたのなら、落ちていても無理はないし、船自体にも、武器は警備の為に搭載してある。あとは、短距離用無線機が何台かある。電話の代わりにでも使うのだろう。
「一体、何に使うんだ？」
「この星では、自分の身は自分で守らんとあかんのやー。まあ、弥白が、公安局の人間って聞いて安心したわ。」
「俺、まだこの星の事全然知らないんだから、危険が迫ったら、助けろよ？」
「人生ドンマイやでー。なるよーにしかならん！」
「だから、助けろって！…俺も、サングラス欲しいんだけど？砂に当たって、眼が見えねぇ。このサイドカーのフロントに風除けの何かつけたほうがいいぞ？」
「残念、サングラスは、俺の分しかないけど、サイドカーの改良は自由にしてええよ。」
さっきから、気になっていたことを勇気を出して聞いてみた。
「あんたも、犯罪者なのか？」
「麗しい少年時代に、気がついたら、ここへ来てた。」
「麗しい少年が、ここへは飛ばされねぇよ！」
「ここに住む人間の全てが罪人ではないけど、俺は、連れてこられた人間だから、区分から言ったら、そうなるんかな？でも、法律

には触れるようなことはしてへん。」
「意味がわからん。どういう意味だ？」
「まー、世間で言う、冤罪や。多分。」
「冤罪？」
「理由は、子供だったから、知らん。でも、俺は、まっとうに生きてたからなー、俺なりに。でも、飛ばされてしまったからには、仕方ないやろ。」
「ポ、ポジティブ…。」
きっと俺なら、いろいろ絶えられない…かもしれない。
「どこかの金持ちの息子の身代わりにでもされたのかねぇ…。ま、考えても仕方ないだろう。良いことあるって！」
「励まされるのは、俺じゃないだろ！」
この楽天性が、この星を生きる強さなのだろうか？
「でも、帽子屋って、呼び方おかしいだろ？なんで、本名を使わないんだ？」
「前の生活が、懐かしくなるやろ？本名で呼ばれるよりは、胸が痛まなくて、番号で呼ばれるよりは、あー、生きてる、って気持ちがするやん！」
そういうもんなのか？
しかし、「帽子屋」とか、「赤の女王」とか、なんとなく、昔、どこかで耳にした事があるような…。
「あ、ルイス・キャロルの小説だな…。」
「何が？」
「おまえの呼び名だよ。確か、そんな名前の登場人物がいたような…。」
その時、砂漠の中から、何かが飛び出した。
次から次へと、飛び出してくる。
「なんじゃこりゃ！機械兵か？」
戦争で、使用する殺人ロボット達に、似ていた。
それらは、長方形の体に、頭と手足が生えていた。手には、槍や、

剣、盾などを持っている。
「トランプ兵や。体が、トランプのそれに、そっくりやろ？」
「説明になってないってばよ！」
それは、二輪車に向かって、迫ってきた。
腰に携帯しておいた、レーザー銃で、頭を撃ち落す。
「お、さすが、公安局の人間やな。俺は、速度を上げて、逃げ切れるようにするから、襲ってくるやつだけ、打ち落としといて！任したで。」
「任された！」
帽子屋は、アクセルを踏み、二輪車は、スピードを上げた。
追いかけてくるトランプ兵の眉間を狙って、銃を打ち込む。
しかし、次から、次へと新しく出現する。
「数が多すぎるぞ！」
「そやから、逃げ切るんや。しっかり捕まってや！」
次は、後ろの方で、さらに大きな何かが、顔を出した。
「なんじゃ、あの巨大ミミズはー！」
「ミミズじゃない。足があるやろ。砂ムカデや。」
「どっちでもいいだろ！」
「外側は、甲殻に覆われてるから、レーザー銃でも無理や。目を狙ってくれ。」
「了解。」
しかし、砂ムカデは、レーザー銃をよけて、もう一度、砂に潜った。
「消えたぞ。」
「地中から、俺らのバイクをひっくり返すつもりとちゃうかな？」
冷静に分析してる場合か！
「ちなみに、砂ムカデは、肉食や。」
「明るく、絶望させる言葉を言うな！」
「だから、ひっくり返される前に、逃げ切るで？」
帽子屋は、さらに二輪車を加速させた。

「おい、前、砂が途切れてないか？」
それは、崖じゃあないですか？
「飛ぶのかよ！」
二輪車は、宙を舞った。
着地の衝撃が、体に伝わって、痛い。
「殺す気かぁ！」
「殺されへん為に、飛んだんだやろ？」
「いや、それはそうなんだけどな、俺が言いたいことはな…！」
「はー？風の音が強くて、聞こえへん。」
もういいよ、頼むから、安全運転で行ってくれ。
「あの機械兵、一体何なんだ？どうして、流刑星に、いるんだよ。」
「だから、あれは、トランプ兵やって。」
「それは、さっき、聞いただろ！流刑星で、機械兵が作れる技術があるなら、宇宙船も作れはしないのか？」
「あれは、この星に元からあったものなんや。」
「元から…？」
「この星が、流刑星に選ばれる前は、ここは、巨大な遊戯空間（テーマ・パーク）になる予定やったんや。ロールプレイングゲームのように、主人公が、現れる敵を倒して、エンディングをむかえるというシナリオでな。」
「じゃあ、トランプ兵は、そのゲームで使われる敵キャラか、何かだったのか？でも、今、確実に、俺達を襲っただろ。」
「そう、安全に設計したはずが、公開前に、応募者を集めて試験的にプレイしてもらったみたいなんやけど、その時に、大量の死亡事故が起こった。不思議（ワンダー）の王国（ランド）は、欠陥作品やったんや。あまりに残虐すぎる事故やったことから、製作会社は、隠蔽工作をした。そうして、この星を丸ごと、政府に渡してしまったんや。」
「流刑星として使う為に？」
「ザッツライト！」
「あの虫もか？」

「大きな虫は、もともと、この星にいたやつが、進化したものらしい。不思議の王国として、使う前は、星にいる原生生物をすっかり駆除したそうやけど。生き残りが突然変異を繰り返して、今では化け物じみた生き物になってる。」

「俺、思い出したよ。その不思議(ワンダー)の王国(ランド)って、もしかして、ルイスキャロルが書いたファンタジーをモチーフにしてないか？」

「せや、よくわかったな。」

やっぱりだ。

だから、トランプ兵が、あの機械兵の名前なんだ。帽子屋とか赤の女王が、住民の呼称になっているのは、洒落なんだろう。

「そういうわけで、意味もなく、命を狙われる可能性があるから、注意してな？」

バイクは、そのまま、崖の下の森を突き進んだ。

さらに奥へ行くと、下のほうに、村が見えた。木で作られた家らしきものが、立ち並んでいる。

「ここが、＜帽子屋＞一派の集落や。俺、リーダー。」

「あんた、ここのリーダーか？」

「そうやで。弥白もつくづくラッキーやなー。新入りが集落に入るには、まず最初にリーダーの許可をもらわないと、始まらんからな。今日は、もう日暮れやし、俺の家に案内するわ。」

村に入ると、帽子屋はある家の前で、二輪車を止めた。

第一章（4）　夜のお茶会

「うおおおお、さすがアニキだあああ！これで、当分は、トランプ兵に襲われても大丈夫だあああ！」
「いや、まずは、襲われないよーに頑張れよ、マーチ？」
そりに詰まれた銃を見て、帽子屋の同居人は、声をあげて喜んだ。
帽子屋の家は、村一番の大きさだった。その為、＜帽子屋一派＞のナンバー二＜ヤマネ＞という、ちょっとたれ目気味の、俺と同い年くらいの男が住んでいた。
そして、ペットの犬、＜マーチ＞が、住んでいた。
「ペットじゃねぇよ！」
「どうみても、犬だろ？」
「ちょっとコワモテな、この顔を見ろよ。俺は、狼だ。狼なめんなー！」
そして、普通の狼の二倍の大きさはあり、しかも、白くて、もふっ、としていた。
「ちょっと待て、どうして狼が人語を話しているんだ？」
マーチが、犬ではなくて、三月兎の名前であるということは、さておき。
「俺が話せる理由かー？それは、ゲームの進行の為に作られた、人工生物だからだよ。敵キャラじゃないけど、主人公のゲームの進行を助けたりするキャラクター、いるだろ？」
顔は、狼なので、怖いが、声はびっくりするくらいかわいらしい声をしている。
「お手。」
「わん！…って、俺は、犬じゃねぇぇ！」
前足で、殴られた。
「ヤマネ！俺、こいつ追い出したい！」
「リーダーが連れて来たんだから、無理だろーが。ま、その辺に

して、紅茶でも飲んで、まったりしようぜ。マーチ、音楽をかけろ。」
マーチが、前足で、部屋の隅の机の上に乗っている、蓄音機のような音楽装置の、スイッチを押した。
すると、急に、激しいビート音の音楽が流れる。
「ファンキーだぜ！」
「…ヤマネはまったりしようぜ、って言わなかったか？」
たれ目男は、自分で蓄音機のスイッチを変えて、ゆったりとしたジャズに切り替えた。
そして、テーブルの上に、ナイフを入れて六等分に処理済の、ブルーベリータルト、クリームチーズケーキ、ガトーショコラ、イチゴのクリームケーキをおいた。
「ヤマネは料理上手いから、何でも作ってくれるんや。全部美味しいから、遠慮なくどんどん食べたらええで！」
「……ここ、流刑星じゃなかったか？」
マーチも、椅子に座って、ヤマネに取り分けてもらったケーキをおいしそうに食べる。
「甘いもの好きだ、俺！」
尻尾が、はちきれんばかりに振られている。
「そうか、あんたは宇宙船から落下してきたわけだから、夕食を食べ損ねてるよな？何か作ってやろうか？」
「いえ…お気遣いなく…。」
落下してから、いろいろありすぎて、もう、一杯だわ、俺のハート。
「でも、リーダー、弥白の妹が拾われたのって、赤の女王の一派だろ？返してもらえんのかな？性格悪いって噂だし。」
「どんなやつなんだ？赤の女王って？」
「血も涙もない残虐なやつって有名なんだ。逆らった者は、容赦なくちょん切るんだ。」
「ちょん切るって…首か？」

「髪の毛だ。」
「……。」
それは、残虐な部類に入れていいのか…？
「ただでさえ労働力が足りないんだから、人は殺さないよ。でも、逆らった者の髪の毛を容赦なく切り落とす。切り落とされたものは、リーダーの命令に逆らったって事だから、他の者達から、つまはじきに合うんだよ。この世界で、協力者がいなくなるってことは、生存確率を下げる事になるからな。弥白も、リーダーがいなければ、砂丘を渡ってこの村に来れた自信ないだろ？」
言われて見れば、確かにそうだ。トランプ兵の事も、砂ムカデの習性も、何もかも知らなかったのだから。
「弥白は、うちの一派に助けられて良かったよ。リーダー、こんなんだけど、強いし？ちょっと楽観的なところがあるから、ひやひやする時もあるけど。」
「ポジティブでええやん！前向き最高ー！」
「…こんなんだけど、うん、まともなんだ。あの船が落下してからすぐに、武器になるものが落っこちてないか、調べに行ってくれたし。的中してたけど。」
「砂丘に落ちたのは、おそらくまだほんの一部だ。他の船体も、この星に落ちたかどうかわからないか？」
武器を回収するときに、船の通信装置も落ちていないか調べてみたが、客室の部分だったらしく、何もなかった。
「何も。空から何かが光って落ちてくるなー、と思って眺めてたら、その船やったんや。他は、この星には何も落ちてない。」
「そっか、じゃあ、他の星への連絡する手段とかは、ないのかな？」
流刑星だしな。
「あるよ。きっと廃墟になってるから、動くかはわからないけど、北に、不思議（ワンダー）の王国（ランド）を作ったゲーム会社のオフィスがある。」
「じゃあ、アリスを取り戻したら、そこへいく事ってできるか？」

「ここからは、遠いけど、出来なくはない。でも…。」
ヤマネは、帽子屋のほうを見た。彼は、それに気がつかずに、ケーキに夢中だ。
「この村にある食べ物とか、資源とかが、他の派閥に狙われる危険もあるし、大虫とか、トランプ兵が襲ってくるかもしれない。リーダーが不在だと、他の皆が危険にさらされる。」
「じゃあ、妹を取り返した後で、行き方さえ教えてくれれば、何とかするよ。」
「大丈夫やろ。俺がいなくても、おまえと、そして、村にはまだ、双子といるから。」
「俺はー？」
「マーチは、数には入れてへん。」
「えええええ！」
白い狼は、気を落としたようだ。
双子とは、話の流れから言うと、帽子屋一派のナンバー三だろうか？
「うん。ディーとダムっていう双子の兄弟だよ。明日、紹介する。」
「じゃあ、帽子屋は、俺をその研究所の廃墟まで、案内してくれるのか？」
「ええで。動くかは知らんけどな。」
「感謝するよ、ありがとう！」
「リーダーが心配だ！俺もいくー。」
マーチが、椅子を降りて、帽子屋の膝の上に、前足をかけた。
「あかん、乗せられる場所がない。」
「そりに引いてくれ！」
顔は、狼だが、心はご主人様にまとわりつく、愛玩犬の気質を受け継いでいるようだ。
プレイヤーに気に入られる為だろうか。
「…わ、わかった。わかったから、マーチは、もう寝ろ。食器を

キッチンに片付けてからな。」
「わーい。」
喜んで、自分の皿をくわえて、キッチンの方へと返しに行った。
「じゃあ、俺らもそろそろ寝るとするか。」
ヤマネが皿を回収し、残った紅茶を飲みながら、ジャズの音楽を聴いた。

第一章（5）　赤の女王

兄さん、朝よー？

そろそろ起きて？

起きてったら、兄貴。

起きなさい、弥白っ！

暗闇から、目を覚ますと、砂漠の上にいた。

私は、そうだ…確か、宇宙船に乗って、それから気を失ったんだわ。

船は墜落したのかしら。

立ち上がると、背後に船の無残な、残骸がある。

そうだ、兄さんは？

「これは、何かと思って来てみたら、良いものを拾いましたね。」

手首を捕まれる感覚があった。振り返ると、銀髪に片眼鏡をかけた青年が居た。砂漠の砂を避ける為か、茶色い布でできたローブをまとっている。

「誰？ちょ、ちょっと離してよ！」

手を振り払うと、青年は、それ以上何もしてこなかった。

「言葉が通じるって事は、この星は、移民星のどこかよね？そうだ、他に人を見なかったかしら。私の兄が見当たらないの。」

「さあ、わかりませんね。」

青年は、やわらかく微笑んだ。

「しかし、あなたは、私達と一緒に来ていただきますよ。」

「えっ？」

パチン、と指を鳴らすと、騎士のような格好をした数人が出てきて、私を捕まえると、手首を後ろにまわして、紐でくくった。
「ちょ、ちょっと何するのよ？」
しかし、騎士のような人々は、次に、大きな袋を私にかぶせようとする。
「そのまま、暴れないように、袋に詰める前に眠らせなさい。」
ちょっと、この人たちは何？
その時、砂漠の砂に、何かが埋もれていたのが、見えた。
いつも、見慣れていた、もの。
「ま、待って！そこに兄貴が砂に埋もれているわ！彼を助けてあげて、お願い！」
しかし、私の声は届かず、私の意識は眠りに落ちてしまった。

目を再び開けると、それはそれはたいそうな部屋に寝かされていたのがわかった。
天井にはシャンデリア、白い家具、花瓶に飾られた花に、私が乗っかっているのは、天蓋つきのベットだ。
まるで、狩られたタヌキのように袋詰めされたわりには、なんたる待遇。
もしや、何かの罠なのかしら。
「その怪しい動きは、なにかのまじないですか？」
挙動不審を咎められた。
「疑わない方が無理でしょう？何よ、さっきの扱いに比べて、この豪華な部屋は。」
気がつけば、傷だらけの砂だらけだったドレスも、白地に青や水色の花柄とフリルで作られた、ロココ調の素敵ワンピースに変わっている。

ひいいいいいい！
「ここでは、女性は貴重ですから、当然の扱いです。」
青年は、黒服に、白い手袋という服装と、その物腰の華麗さから、誰かの執事のようだった。
「でも、袋につめたわよね？」
「おとなしく我々についてくるとも思えませんでしたので、詰めました。」
淡々と、事務処理的な口調で話す。
「あなたには、これから、我らがリーダーに面会していただきます。ついて来て下さい。」
「リーダー？」
「ええ、この村のリーダーですよ。」
「村？この星は一体、何なの？」
案内されるまま、ついていく途中で、自分がおかれている状況をだいたい理解できた。
「ここが、＜赤の女王＞の部屋ね？」
大きな扉の前に連れていかれる。
「ええ、くれぐれも、怒らせないようにしてくださいね。」
青年は、そう言い残して、きびすを返した。
扉を開き、中へ進むと、豪奢な椅子の上に、ゆったりとその者は腰かけていた。
やせた長身の体。髪と肌はぬけるように白い。唇も、白い口紅で色を消しているみたいだ。しかし、瞳だけが、黒味を帯びた赤だった。
波打つ長い髪と、長いまつげは、中世的な美しさを醸し出している。が、しかし…。
「赤の女王って、男だったのっ？」
「誰も、ぼくが女だなんて一言も言ってなかっただろ？」
それは、もっともだけど。
「ようこそ、この星へ。歓迎するよ。」

「私は、早く帰りたいんだけど。」
「それは、無理な注文だね。だから、君は、ここへ来たからには、ここの生活に慣れてもらわなくちゃならないよ。」
「郷に入れば、郷にしたがえ、ってこと？」
「そんな古いことわざがあったね。先人の知恵だね。」
右手にもったグラスのワインを、口に含んだ。唇が、赤く染まる。
「僕と結婚するのは、ヤだろう？」
「ヤ、ね。」
「即答かい。」
イエスという方が、変だ。
「まあ、いいや。僕も、君には、興味ない。でも、そうすると、誰かに君をあげなくてはいけない。さあ、どうしよう？」
「誰とも結婚なんてしないわよ。」
「それは、駄目だ。おきてに反する。暴動が起こるよ。」
「知らないわよ。私の責任になるのかしら？」
「村の平安を守るのが、僕の仕事だからね。」
浮かべた微笑は、天使のように美しかった。
「実は、赤の女王一派のナンバー二は、そこにいる白兎（ホワイティ）なんだけどね。」
私を連れて来た、執事の青年だ。
「僕より、彼のほうがもっと、ヤだろ？」
もっと、かどうかは、比べようがないけれど、いやなものはイヤだわ。
「だろ？あいつは、堅物で、鉄面皮でつまらない男だよ。遊び心もないし。」
「でも、この村で、二番目に強いんでしょう？」
「まあね。じゃあ、僕が取っておきの三番目の提案をしてあげようか？」
赤の女王が、いたずらっぽく微笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9576k/

ゼロの国のアリス

2011年10月2日14時05分発行